

# 日本語に関わる経験によって韓国人学習者の認識は どのように変わるか

－韓国人留学生に対するインタビュー調査から－

河先 俊子

## 要 旨

本稿は、日本語学習や日本留学は韓国人学習者にどのような心理的、社会文化的な変化をもたらすのかという問題関心に基づき、2人の大学院生にインタビュー調査を行った結果を報告するものである。インタビュー調査から、①日本語学習動機が消極的・他律的なものから、積極的・自立的なものに変化していたこと、②韓国に所属していることを意識している反面、距離感も感じるようになったこと、③国家を基準として人を見ることに違和感を持つようになったこと、④日本語や日本人との関係に基づいた役割認識を形成していることが確認できた。また、このような認識変容には、日本人との直接接触の経験、日本人及び韓国人の自分に対する視線や態度が関係していることが分かった。

【キーワード】 動機、 役割認識、 直接接触、 歴史認識、 アイデンティティ

## 1. はじめに

韓国は、周知の通り日本語学習者の最も多い国であり、日本語教育の歴史も古い。また、日本語、日本語教育に関する研究も盛んであり、多くの日本語教師、研究者を輩出している。韓国における日本語教育は制度的に行われ、重層的な人材に支えられているという点で世界をリードしているといっても過言ではないだろう。その一方で、韓国と日本との間には、未解決の歴史問題が横たわっており、日本政府の言動をめぐって、韓国のマスコミなどで反日機運が高まることもしばしばである。また、韓国社会には、日本の大衆文化が広く受け入れられている反面、日本に対して否定的な感情を持っている人が多いという現状もある。このような環境において、韓国の人々は何をきっかけとして日本語学習を開始するのだろうか。特に、日本語を学習し、それを長期間継続して、自分の職業と結びつけている人々は、どのような心の葛藤と戦い、それを克服しているのだろうか。日本語学習経験、日本留学経験は韓国人学習者にどのような心理的、社会文化的な変容をもたらすのだろうか。

本稿はこのような問題関心に基づき、韓国の大学の日本語関連学科を卒業して日本の大学院に進学し、現在博士課程に在学中の留学生2名を対象としたインタビューを行った結果を報告するものである。

## 2. インタビューの概要

インタビュー対象者は、日本の大学の博士課程に在籍する30代の女性二名であり、筆者とは大学で同じゼミに出席する関係である。インタビューは、あらかじめ質問項目を渡し、考えてきてもらった上で行った。対象者に渡した質問項目の要約は下記の通りである。

- ① 日本語学習経験について：機関、場所、動機など
- ② 日本滞在経験について：場所、目的、期間など
- ③ 日本人との接触経験について
- ④ 「日本」/「韓国」と自分との関係について：「日本」/「韓国」は自分にとってどんな存在か。「日本」/「韓国」は自分をどのように見ていると思うか。「日本」/「韓国」に対してどんなイメージを持っているか
- ⑤ 日韓関係について：どのような立場で日韓関係を見ているか。力関係についてどう思うか
- ⑥ 日本語のコミュニケーションについて：どのようなコミュニケーションの型が日本語らしいと思うか。それを自分は使っているか。使うことに対してどのように感じているか

インタビューは、この順番に添って行ったが、④、⑤に関しては、対象者の認識に影響を与えた体験も具体的に話してもらった。この点、半構造的なインタビューに、ライフストーリー法を取り入れることも試みた。なお、一人あたりの所要時間は1時間半から2時間半である。

インタビュー結果は書き起こし、日本語学習開始後今までどのような認識の変容があったか、またその認識変容に影響を与えた出来事は何であったかという観点から分析した。

### 3. インタビュー結果

#### 3.1 日本語学習に対する関与度の深化

まず、日本語学習を始めたきっかけや動機についてたずねたところ、両留学生とも（以下留学生 A、留学生 B と表記）自らの意志で始めたわけではないと答えた。留学生 A は（大学で日本語を専攻したのは）「自分の意志とは一切関係ありません」とした上で、もともと小学校の教員になりたくて大学を受験したが、失敗し、翌年もう一度チャレンジしようとしたところ、母が心配してレベルを下げるように勧めたため、あきらめて日語日文学科に進学したと語った。もともと関心がなかったため、1、2年生の時は、全く勉強せず、ボランティア活動に夢中になっていたという。留学生 B は高等学校から日本語学習を始めているが、それは大学受験のために家庭科か第二外国語のどちらかを選ばなければならないという状況があり、家庭科は嫌いだったので、入学した高校の第二外国語であった日本語を選んだということであった。彼女はもともと英語が好きで、英語で仕事をしたいと思っていたが、大学入試の際、日本語の方が偏差値が低かったため、次の選択肢であった日本語にしたということである。彼女は日本語教育学科に入学したのであるが、語学を専攻できる学科に進みたいという希望があり、また、語学を教えることに興味を持っていたので、その対象が英語から日本語に変わったという認識を持っていたということであった。

このようにどちらかというと消極的、他律的な動機づけによって始めた日本語学習であるが、両留学生とも大学在学中にそれに積極的に取り組むようになっていく。留学生 A は大学3年次、ボランティア活動ばかりしていた自分を反省し、自分の意志ではなく始めたのではあるが、後悔しても母を恨ん

でも仕方がないから、自分の専攻を頑張ろうと思うようになったという。そして、小学校の教員になれなかったから、大学院に進学して大学の先生になろうと思うようになったということである。そして、彼女は交換留学生の選抜試験を受け、合格して日本に留学することになる。交換留学生に選ばれることは、その学科でトップであることを意味し、誰もが目指していたという。一方、留学生 B は、3年生のときに、弁論大会で優勝し、報奨として日本旅行に招待された。それをきっかけとして日本に興味を持つようになり、日本留学を考え始めたということであった。

このように、日本語学習の動機は自律的なものに変化しており、積極的に日本語に関与するようになっていく。そして、この変化には、自分の日本語学習への取り組みが評価されるという経験が関係しているように思われる。

#### 3.2 日本語・日本人との関係に基づく役割認識の形成

韓国において「日本語」とは、植民地時代に母国語である「韓国語」を抹消するまでに強制された言語であり、日本への同化の象徴でもあったため、否定的な感情を伴って捉えられることが多い。また、韓国語と日本語は言語学的に類似していることから、日本語を学んでも、異なった思考方式や価値観を学び視野を広げることには役立たないと言われることもある。このように、日本語学習は、韓国社会において否定的に評価されがちであり、学習者に対しても「なぜよりによって日本語を勉強しているのか」といった問いが投げかけられることが多いのである。この点、日本語学習者は他の外国語学習者以上に、「なぜ日本語なのか」ということを強く意識せざるを得ない状況にあると考えられる。

今回のインタビューでは、日本語学習の動機の変化を話題とした文脈で、留学生 B が「なぜ日本語なのか」という問いとの対決について言及した。彼女はこの問いに対して以下のように対処したと話した。

日本語よりも教育の方にウエイトがある。楽しく勉強できる方法に興味がある。「よりによってなんで日本語なの」と言われることがあったが、「教育だから」と考え、詳しく自分に問いかけることはなかった。

このように留学生 B は、教育に重点を置くこと

によってこの問いに対処してきたのであるが、この問いは、「なぜ日本語を教えようとしているのか」という形でずっと続いてきたという。それに対しては、以下のように対処し解決していた。

非母語話者が日本語の正しさについて言っていることの滑稽さを感じていた。だから、教え方がうまいということにかけようと思っていた。でも、それだけはないような気がしていて、その言語をどう見ている、どう捉えていて、何を伝えようとしているかということとをどれだけアピールできるかということも大切なのかなと思うようになった。韓国語が話せる一人として、もう一つの道具を持った人間としてこれを使ってこんなことができるという一つのサンプルとして私自身が表象できればいいと思ってきた。

このように留学生 B は「なぜ日本語なのか」という問いと対決し、その答えを見つけ出すプロセスを経て、日本語との関係に基づく自分の役割を明確化していると考えられる。

一方、留学生 A の語りには「なぜ日本語なのか」という問いに対する言及は表れなかった。しかし、日韓関係における自分の位置についてたずねた際に、以下のように述べている。

以前は帰国して日本語教師になり、日本で経験したことを教えることばかり考えていたが、韓国語を教えながら去年から日本人に韓国のことを教えることにやりがいを感じるようになった。私が知っている日本よりは私が知っている韓国のことの方が多い。日本人が韓国のことを分かってくれるようになり、民間レベルで親密になるということが、私のやるべきことなんじゃないか。

このように留学生 A は「なぜ日本語なのか」という問いとの対決というプロセスは経ないものの、日本人との関係に基づいて、韓国のことを教えるという自分の役割認識を形成している。このような役割認識を持つようになった具体的な出来事についてたずねたところ、自分がチマチョゴリの着方など韓国のことを教えている時、みんなが目をきらきらさせて興味を持って聞いてくれるのを見たら、教えがいや喜びを感じたという。留学生 A の場合、韓国人としての背景が日本社会で積極的に評価されることが、役割認識の形成に寄与していると言える。

一方、留学生 B は前述の語りからもうかがえるように、非母語話者として日本語を教えることについて悩んだ結果、韓国語に加えて日本語という道具

を持った人間として、できることが増えた自分を提示するという役割認識を持つようになったと言える。

「自分に何ができるのか」悩んだという語りは、日本は自分をどう見ていると思うかについてたずねた際にも出てきており、「最近は、(日本語教育業界の人) 私自身のアイデンティティをはっきり持ちつつ、マルチな見方ができる人としてだったらなんかできるかもしれないというふうに見てくれているような気がする」と答え、それに加えて自分が貢献できる分野が前よりはっきりしたと語っている。このように留学生 B も悩みながらも日本における自分の役割認識を肯定的に形成していくが、それには、2 つ以上の視点を備えているという利点が彼女の所属している社会で肯定的に評価されているという認識が関与しているようである。

### 3.3 「日本」及び「韓国」と自己との関係

3.2 の役割認識に関する語りでも表れたように、留学生は自分の中の韓国的な部分を意識すると同時に、それを日本語や日本人と接合させて役割を認識している。この点、彼女たちは、韓国的なものと同本的なものを自己の中で接合させていると考えられる。

「韓国」が自分をどう見ているか意識したことはあるかという問いをきっかけとして、留学生 A は以下のようなエピソードを語った。

去年、韓国に帰ったとき初めて心が重くなって日本に帰ってきた。私が日本に住んでいるからそうなのだと思うが、竹島問題について「日本人はどうしてあんなの」とみんなに言われた。自信を持って、「それは日本人はという問題ではなく、学校教育で洗脳されているから。日本人は教わってないし分からない。日本人に問題があるのではなく、国の問題だ」と強く言った。昔だったら、こんなことは言えなかった。

このエピソードからうかがえるように留学生 A は、日本を弁護するような発言を行っており、その点で韓国にいる友人とは一線を画している。彼女はこのような発言をしたことについて「寂しかった」と語り、またこのような発言ができたのは「日本でいい人に恵まれているからだ」と話した。さらに留学生 A は、日本で勉強しているからこそ、「日本人はどうなの」ということを代表して言うことを求められているような気がする」と語った。また、韓国の友人は自分が日本人の考え方に近づいていると思っ

ているかもしれないということであった。

このように、留学生 A は、韓国にいる友人からは、自分の中の韓国的なものを疑われていると感じながらも、日韓関係の政治的な問題に関して韓国の友人とは異なった見解を示す。しかし、以下の「日本」が自分をどう見ているか意識したことはあるかという質問に対する答えからうかがえるように、自分が「韓国」に帰属していることを常に意識して生活しているといえる。

韓国にいと自分がもし間違いを犯したら親の顔に泥を塗ることになると思うが、日本にいと自分が間違いを犯したら、韓国人留学生みんながああなんだと思われ、「韓国」に泥を塗ることになるような気がする。

一方、留学生 B は、「日本」と「韓国」とに対する自分の立ち位置に関する質問に対して、内容によって少し変わるとした上で、一步はなれたところで発言し、どちらにもアプローチできる第3の立場に立ちたいと語った。彼女がこのような立場を志向するきっかけとなったのは下記のような経験と関係がある。

来日して5ヶ月後、一時帰国した時に飛行機である男性と知り合い、日本に戻った後、その男性が経営する貿易会社で通訳の仕事をするようになった。社長は、保証人になってくれるなどいろいろな面で面倒を見てくれた。それまで日本人の男性は怖いという根拠のないステレオタイプや偏見があったが、違うかもしれないと思うようになった。もしかすると一度も現地の人と人間関係を持ったことがないのに、読んだり聞いたことだけで判断してはいないだろうかという問いが始まった。仕事の際に、取引先の韓国人の社長からあなたは韓国人なんだからこれもやってよということをおかしく思い、腹が立った。また、韓国からの訪問客が社長に対して私が社長の彼女かというふう聞いた。意外にも社長は私に謝ったが、彼は私の気持ちを読み取ってくれたのだと思う。

また、留学生 B は、「韓国」に対するイメージについてたずねた際に、来日して4、5年後に韓国・中国の子どもたちに歴史を教える活動を行った時、日・中・韓の歴史観の違いに気がつき、韓国での教えられ方やそこで得てきた知識に対する疑問を抱くようになったという。そして「今まで何を教えられてきたんだ」と思い、ショックを受けたと語った。彼女は、中国はどのように自分たちの存在を支えてきたのか、それはなぜ必要だったのかを考え、自分

が両者の考え方や歴史を知るということは、ただ事実を知る以上の意味があると考えようになったという。そして、次の世代に伝えていくとき、少なくとも偏った伝え方だけは止めようと思ったと語った。彼女は、このような認識に至る過程で、「何で日本語を教えていかなければならないか」という問いと結びついたらと話している。

さらに、留学生 B は、日本に対するイメージが悪くなった原因について語る中で、「自分のことが分かってもらえない」と話し、「韓国人はそうなのね」というように個人としてではなく「韓国」と結びついている部分のみで評価され、それ以上の存在としては見てもらえないことに対する不満を述べている。

このように、留学生 B は、自分の文化的なアイデンティティは韓国にあると認識している一方で、「韓国」に対して違和感も持ち、一線を画そうとしていることがうかがえる。

このような留学生が意識する韓国人性は、日本人と比較したときの自己の弱さに対する認識と結びつく場合もありそうである。留学生 A によれば、研究生時代、レストランでアルバイトをした際に、きつい仕事だけ自分に押し付けられたので、自分が弱いこと、あるいは差別されているという感じを持ったということである。このような感覚は、その後のコンビニでのアルバイトで、自分より長く働いている日本人よりも高い時給をもらい、金庫の管理を任せられるようになったという経験を通して解消されている。また、留学生 B の「ネイティブじゃないから」という発話からも、マイノリティとしての自分の弱さを意識していることがうかがえる。この感覚は、周りの日本人から「マルチな見方ができる人」として見られているという感覚、学内で様々な仕事を任せられるという経験を通して和らぎ、現在は韓国語母語話者として日本語を教えることに意義を見出すようになったのは前に見たとおりである。

### 3.4 国家を帰属先として人を見ることへの違和感

両留学生の語りの中には、国家という枠組みで人を捉えることへの違和感が表れる箇所があった。留学生 A は、

日本に来る前は、韓国・韓国人と日本・日本人と分けて考えていた。今は韓国だから日本だからではなくて、どこに行ってもこういう人がいる、一人の人間として

見るようになった。これが日本に来て考え方が一番変わったこと。今私が会っている日本人は大好きだが、日本がどんな国で、好きかと言われたらまだ分からない。

と語っている。このように思うようになったきっかけについてたずねたところ、

日本で生活しながら辛いこと、大変なことがあったが、何かあったら自分のことをおいて走ってきてくれる。日本人はこれ以上深く付き合えないというのが私はそうではないと感じた。そういう人に出会ったことが考え方が変わったきっかけだ。

と答えた。彼女は、韓国語を教えるを通して、知り合った日本人と家族ぐるみの付き合いを続けていること、大学時代の助手やチューターに勉強のことで悩んでいたときに助けられたエピソードなどを話してくれた。

一方、留学生Bも、上述のアルバイト先での出来事話を話した際に、「どここの国の人だからという枠はないかもしれない。それは幻想だ」と話した。両者にとって、日本人との直接接経験が、認識の変容をもたらしたと言うことができる。

### 3.5 歴史認識について

3.4 までは、日本語学習開始から現在までの心理的な変化をそのきっかけとなった出来事と関連づけながら述べてきたが、最後に両留学生の語りの中に出てきた、日本人の歴史認識に関する部分に触れておきたい。

留学生Aは、日韓関係に対する認識についてたずねた際に、歴史問題に言及し、以前は政府＝日本人と思っていたが、国民は何も教わっていない、日本の国に問題があって国民ではないと述べた後、下記のように述べている。

従軍慰安婦の問題もやった側は分からないが、やられた側はいつまでも傷として残る。それをいつまでも言ってもいても仕方がないし、過去は終わりで未来志向になった方がいいと思う。でも過去のこともなかったのではなく、認めることは認めなければならない。素直な気持ちで謝罪すれば、韓国人も許せると思うが、政府の行動は違っているので残念だなと思う。これを付き合いのある日本人に話すと「日本政府はおかしい」という人は多い。

また、もし日本人に「それはただ過去の問題ではないか」と言われたらどう思うかという質問に対して

は、その人の根本的な考え方に問題があると思うと答えた。

一方、留学生Bは日本に対するイメージについてたずねた際に、歴史の問題に言及し、下記のように述べた。

例えば歴史の問題を考えてみても、日本人は「内政干渉でしょう」で終わってしまうがそれでいいのだろうか。知らないから葛藤していないだけ。葛藤をしないと前に進めない。もうちょっと知りましょう。その葛藤を表に出しましょう。正しい正しくないって誰が決めるんだろうと思うようになって、どのくらい知っているか、何を知らうとしているのかというメタからみた問いをしていかないと、話にならないという考え方が強くなった。

このように、両留学生とも日韓関係の歴史について日本人が韓国人にとっての歴史的事実を知らないことを問題視し、少なくともそれを知り、それを認めることを求めていることがうかがえる。

### 4. 日本語教育の実践への示唆

以上のように、二人の韓国人学習者は、日本語学習経験、日本への留学経験を通して、日本語との関わりを深化させ、日本語や日本人との関係に基づく役割認識を形成させていた。そして、このような変化には、日本語学習への取り組みが評価された経験、仕事などを通して日本社会で必要とされた経験、自己の構成要素としての韓国性が評価された経験などがあることが分かった。また、自分と「韓国」との結びつきを意識する一方で、韓国にいる人々からは一定の距離感を感じたり、自分の所属先である「韓国」に違和感を持ったりしていることも分かった。この点、彼女たちに文化的アイデンティティは日本と韓国との間で揺れていると考えられる。このような文化的アイデンティティの揺れは、日本人及び韓国人の自分を見る視線、つまり日本人からは「韓国」を代表しているように見られ、韓国人からは「日本」に近づいているように見られること、と関係が深いようであった。さらに、特定の日本人との深い接経験は、国家を枠組みとするステレオタイプの日本人観を崩し、一人の人として日本人を見ることを促している。このような文化的アイデンティティや人間観の変化は、留学生Aの場合は、政府のやっていることには限界があるから、自分は韓国語を教えるという民間の次元で頑張ろうという

役割認識、あるいは自分の周りの韓国人に積極的に日本を理解してもらうように働きかけるという行動に結びついていると考えられる\*1。

このような二人の語りから、日本語教育の実践現場への示唆として何が読み取れるだろうか。月並みではあるが、以下の点を指摘したい。まず、日本人との付き合いは認識変容に重大な影響を及ぼすということである。この点、日本語教育の現場でも、日本人と直接接触する機会を設けていくことが重要だと言えるだろう。第二に、大学、アルバイト先など所属する社会において必要とされているという感覚、特に韓国という背景を背負っているからこそ肯定的に受け入れられるという感覚を持つことが、彼女たちの肯定的な自己認識、役割認識の形成に関わっているようであった。従って、日本語教育の現場でも、このような感覚を持つような場を提供することも重要になってくるかもしれない。さらに、日本社会と密接にかかわっていく韓国人留学生にとって、日本人の歴史認識は重大な懸案事項であることに鑑みれば、日本語教育の現場でもこの問題を積極的に取扱った方がいいと考えられる\*2。

## 5. 今後の課題

筆者は、「①日本語学習及び日本留学の経験は、韓国人学習者の日本語及び日本人との関わりを深化させ、日本との関係に基づいた役割認識を形成させる。②またその過程で、文化的アイデンティティが変化する。③認識変容には、日本人及び韓国人の自己に対する視線や行為が重大な影響を及ぼす」という曖昧な仮説を持って、聞き取り調査を始めた。そして日本語学習及び日本留学による心理的、社会文化的な変容を、関係性に基づくアイデンティティ、文化的アイデンティティの側面から捉えることを模索し始めたところである。本稿は、聞き取り調査のごく初期段階の部分を報告したものであり、調査報告としても不完全なものである。また、以下のような論理的な枠組み、分析方法に関する問題点も山積みである。

まず、植松(1999)が指摘するように、全般的なアイデンティティとその下位組織としての文化的アイデンティティを区別する必要がある。例えば、人は自尊心を保つために様々な戦略をとるが、Crocker and Major(1989)が指摘するように、民族集団が否定的な評価を受けている場合、民族集団と自分自身を

分けることで自尊心を保つという戦略がとられる。従って、国家と人を区別する意識や自国集団との間に一定の距離をおく意識も自尊心を保つための戦略との関連において分析できるかもしれない。また、アイデンティティの構成要素と役割認識との関係、それに影響を与える要因などについての論理的な枠組みを作ることも今後の課題である。特に、今回は分析できなかったのが、日本語及び日本語のコミュニケーションの型の習得とその実行もアイデンティティに影響を与える要因として、論理的な枠組みの中に取り入れたいと考えている。さらに、学習者の認識変容をアイデンティティの側面から捉えた時、心理的変容ないしは社会文化的変容の概念と分析枠組みとどのように接合させるのかという問題も残っている。それと同時に、認識・行為・感情のどのレベルで分析するのかということも明確にしておく必要があるだろう。

これに加えて、インタビューとその分析に関する方法論的、技術的な問題もある。本研究では、ライフストーリー法を用いようとしているが、それが研究の目的に適っているかどうかは再検討の余地がある。さらに、ライフストーリー法も今のところ十分に使いこなせているとは言えないため、技術的な訓練も必要である。

以上のように課題は山積みであるが、一歩ずつ解決し、韓国人学習者に対する日本語教育が果たしている役割を明らかにし、今後の発展にも役立てていきたいと考えている。

## 注

\*1.留学生 A は自分の両親や韓国に住んでいる友人に日本人の友人を合わせているということであり、そうすることによって彼らの日本に対する認識が変化していると感じている。

\*2.フェリス女学院大学では、2005年度の日本事情の授業で日本人の歴史認識を取り上げ、その現状と要因について調べたり、日本人学生、欧米からの留学生を交えて討論するという活動を行った。その結果、欧米の留学生という東アジア外部の参加者の存在は、留学生の意識を高めるのに有効であるという示唆を得た。

## 参考文献

植松晃子(1999)「民族的アイデンティティ—論理的枠組

- み」『お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要』1, 45-56
- 岡本祐子(2002)『アイデンティティ生涯発達論の射程』ミネルヴァ書房
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 『レクチャー 社会心理学 4 セルフ・アイデンティティ・インタラクション』垣内出版, 2000年
- Crocker, J., &Major, B. (1989) Social stigma and self-esteem; The self-productive properties of stigma, *Psychological Review* 96, 608-630
- E. H. Erikson (1959) *Psychological issues identity and the life cycle*, International Universities Press (小此木啓吾(訳)『自我同一性 アイデンティティとライフサイクル』)

かわさき としこ/フェリス女学院大学 留学生センター  
kawasaki@ferris.ac.jp